【概要】

本稿では，先行研究で議論の不足していた品種更新時の知識・技術の構築過程について長野県中野市の「シャインマスカット」を事例に研究を行った．

調査の結果，品種更新でも先行研究と同様に「獲得」「調整」「共有」「改変」のプロセスを経て，産地に知識・技術が構築されていった．特に中野市では農協の影響力が強く，生産部会主導で新品種導入が行われており，新品種に関する情報が円滑に伝達しやすい体制が整備されていた．また，他にも農協の営農指導員による新品種の栽培技術講習会が頻繁に行われていた．また，「共有」の場面で，先行研究では，ある程度，知識・技術が「共有」されると農協などのフォーマルな組織による栽培技術指導が減少し，生産者同士のインフォーマルな相互作用が卓越するとしたが，中野市では農協の影響力強く，インフォーマルな相互作用はあまり確認できなかった．さらに中野市では「シャインマスカット」の主力品種の早期産地化を図るため，知識・技術の「改変」を行い，得られる利益を最大限享受できるように行動していた．

キーワード：農業，新品種，ネットワーク，知識・技術の構築過程